

あの天井の上にいた人々の愚かな真心を見つめたイエス様は、同じ目で、この税の取り立て屋を見つめました。この取り立て屋はレヴィと言いました。屋台に座っているレヴィに、イエス様は声をかけ「私と一緒に、呑みに行こう」と誘ったのでした。その声を聴くと、レヴィはすべてを屋台に残して立ち上がり、イエス様について行きました。そして宴会が始まります。穢（けが）れた大金持ちのレヴィです。すぐ、自分の家で支度をさせて、やくざ仲間を呼び出して、それはそれは盛大な宴会となりました。

宴もたけなわとなり、みんながくつろいでいるところに、正義の味方である「ファリサイ（分離）派」の人々がやってきました。イエス様の弟子に、こう言って責めました。「なんだ、こんなやくざ者たち・こんな穢（けが）れた連中と。よく、楽しそうにお酒なんか飲めるものだな。」イエス様は、上機嫌で、これに答えて言いました。「いいかね。健康な人々は、医者が必要ないんだ。でもね、病人は、医者を必要としている。正義の味方の皆さん。私はあなたたちを呼んでいない。そうではなくて、このロクデナシの穢（けが）れた連中を仲間とした。この連中が、心をさっぱり切り替えて、憑き物のような悪いものから解放されるためにね。」

正義の味方の人々は、イエス様にこう言いました。「あなたのお師匠・ヨハネは、すごい人だった。その弟子たちは、厳しく身を律し、断食し、祈りの中で過ごしていた。私たちの弟子も、そうしている。それが何だ、あんなの弟子たちは。このだらしない様子。食べ、呑み、騒いでいる。」イエス様はこれにこう答えました。「花婿が一所にいる時、結婚式の披露宴で、お客は断食などしない。ご馳走を喜んで食べ、できるだけ上機嫌で過ごすものだろう。今は、その時だ。しかし、その婚宴のただ中から、花婿が奪い去られる時が来る。その時こそは、この連中も、ぱったり元気をなくしてしまい、何ものを通らなくなる。断食するのは、その時だ。」

そしてイエス様は、この正義の味方たちに、もっとよく分かるようにと、ふたつのたとえ話をしてあげました。「新しい服にはさみを入れて布を切り出し、古い服の継ぎ当てにする人は、いないでしょう。そんなことをしたら、新しい服はだめになってしまうし、古い服もおかしくなってしまう。同様に、発酵激しい新しいぶどう酒を、堅くなった古い革袋に入れる人は、いないでしょう。そんなことをしたら、ぶどう酒から出る気泡によって、革袋が張り裂けてしまうにきまっているのだから。」そして、手許（てもと）のグラスを手にとって、ワインの香りをかいで、上機嫌でこう言いました。「こうしたいい酒、古いぶどう酒は、いいものだ。これを飲んだら、新しいぶどう酒をくれと言う人は、まあ、いないだろうな。やっぱり、古いものもいい、と、まあ、そう言うだろう。あんなたちは、なるほど、そういう事なのさ。それは、それで、分かる。でも、よく考えてみた方がいいぞ！」

<中略>

また別の「休み」と定められた土曜日のことです。イエス様が公民館に入ることがありました。イエス様は大人の学習会に参加している人々の中に入って、いろいろな事を教えていますと、そこに一人の人がいました。その人の右の手は萎（しな）びていました。その時、そこに、イエス様をじっと見つめる目がありました。「ファリサイ（分離）派」と呼ばれる人々と「律法学者」と呼ばれる人々の目でした。今日は「休み」と定められた日です。そうして、ローマ帝国にみんなで立ち向かう、大切な日です。「スト破り」をして病人を癒すのではないかと、イエス様を監視する目が、そこにあったのでした。

「ここでイエス様を告発してやろう」と無言のうちに話し合う声を、はっきりと聞き取った上で、イエス様は右手が萎えている人に向かって言いました。「さあ、立ち上がりなさい。そして、みんなの真ん中に立つのです。」

そしてイエス様は、自分を厳しく見詰めている人々に向かって、このように尋ねて言いました。「ひとつ、伺いたい。『休みの日』と定められた日に許されているのは、良いことをすることか。それとも、悪いことをすることか。助けることか。それとも、めちゃくちゃにすることか。」

イエス様を見詰めていた厳しい目を、一つずつ、イエス様は見詰めながら、手の萎えた人に言いました。「あなたの手を伸ばしてごらんなさい。」

すると、その人の手は伸びたのです。すっかり、元通りになっていました。それを見ていた人々は、すっかり、何が何だか分からないような思いに包まれてしまいました。そして、互いに「これは大変なことだ。」「こんなことをされて・・・」「放ってはおけない。」「何とかしなければ」と、口々に語り合い始めたのです。

そうしたことがあった後の日のことです。イエス様は山に登って行かれました。祈るためです。神さまに、夜通し、イエス様は祈りました。そして朝になったので、イエス様はお弟子さんたちを呼びよせました。そして、その中から 12 名を選びました。その 12 名に「使徒」という名前を、イエス様はお付けになりました。

その 12 名は次の通りです。まず、「ペテロ」とも呼ばれたシモン。その兄弟のアンドレ。それから、ヤコブとヨハネ。そして、フィリポとバルトロマイ。マタイとトマス。アルパヨの子であるヤコブ。「熱心党」と呼ばれたシモン。ヤコブの子であるユダ。そして、カリオテ村のユダ——彼こそが「引き渡した人」と呼ばれた裏切り者となります。

そして、お弟子さんたちと一緒にイエス様は山から降り、平地に足を付けて立ちました。そこには大勢のお弟子さんたちがおり、また、ものすごい人数の人々がいました。その人々は、首都圏であるユダヤ地方の全土から、とりわけ首都であるエルサレムからやって来ていました。また、海沿いのギリシア都市国家であるティルスとシドンからも、やって来ていました。その人々は、あるいはイエス様の話を聞くために、また、病気を治してもらうために、来ていました。そこには穢れた霊に振り回されて、周囲に流され有象無象の大衆となってしまっていた人々がいたのです。そして、その人々は癒されて行きました。この大衆化された人々・右も左も弁（わきま）えなくなっている有象無象の群衆は、何とかしてイエス様に触ろうとしました。と言うのも、イエスさまからは不思議な力が流れ出て、人々をさっぱりと綺麗に癒して行ったからです。（どうぞ、この様子に、教会の姿を重ねてイメージしてください）

イエス様はその群衆の苦しい低みから目を上げて、お弟子さんたちを見つめました。そして、こう語り始めたのです。

「幸せ者だ。貧しい人々は。

神さまが取り仕切ってくださる国は、あなたたちのものだ！

幸せ者だ。今、おなかをすかせて苦勞している人々は。

おなか一杯になるぞ！

幸せ者だ。悲嘆にくれて涙を流すあなたたちは。

きっと、笑顔でいっぱいになるぞ！

幸せ者だ。嫌われ、憎まれているあなたたちは。

差別され、いつも責められている人々は。

幸せ者だ。『人の子』である私のために『悪人』とされ、

のけ者にされるあなたたちは。

そんな時には、喜ぶのだ！

飛び跳ねて喜べ！

いいか、よく見て見ろ。天での報いは大きいぞ！

あの連中は、代々、まさにそのように、

預言者たちにしてきたのだから。」

「さて、呪われているのは、富んでいるあなたたちだ。

もうすでに、必要を満たされてしまっている。

呪われているのは、おなか一杯になっているあなたたちだ。

もうすぐ、あなたたちは空腹になる。

呪われているのは、今、笑っているあなたたちだ。

もうすぐ、後悔の痛みに呻（うめ）き、泣きわめくことになる。

呪われているのは、みんなに褒められているあなたたちだ。

あの連中は、代々、まさにそのように、

偽（にせ）預言者たちにしてきたのだから！」

「だが、今、私の声を聴いている人たちに、私は言うておく。

あなたたちの敵を大切にして、大盤振る舞いしてやれ。

あなたたちを憎む人々には、美しく親切なことをしてやれ。

あなたたちを呪ってくる人々を、祝福してやるのだ。

悪意を持って向かってくる人のために、

神さまへのとりなしの祈りをささげてやれ。

頬をひっぱたく人がいたら、反対の頬を向けてやれ。

上着を奪おうとする人に行き当たった時は

下着も奪おうとするだろうから、その通りさせてやれ。

求める者には与えてしまえ。誰にでも、そうするのだ。

あなたたちが持っている物を欲しがる人がいたら

返してもらえるかどうかなど忘れて、渡してしまえ。

誰かに対して、

『あいつらは、こうすべきだ』と思うことがあるなら
その通り、その『誰か』にしてやるんだ。」

「なあに。あなたたちを大切にしてくれる人を

あなたたちが大切にしたところで、
そこからどんな御利益が得られるものでもないだろう？
神さまからの御利益からまったく外れているはずの
あの頓珍漢な大馬鹿者でも、
自分を大切にしてくれる人は、大切にしているじゃないか。

あなたたちにとって都合の良いことをしてくれる人たちには
その人たちの都合を考えてあげるだろう。もしそうだとした場合
そこからどんな御利益が得られるものでもないだろう？
あの頓珍漢な大馬鹿者でも、同じことをしているじゃないか。

『この人だったら返してくれるだろう』と期待できる人たちに
何かを貸し与えたところで、
そこからどんな御利益が得られるものでもないだろう？
あの頓珍漢な大馬鹿者でも、同じ頓珍漢仲間に、
『こいつだったら返してくれる』と期待して、
何かを貸し与えたりしているぞ。」

「いいか、仇敵（きゅうてき）を、大事にするんだ。

敵の都合のいいことをしてやれ。
『どうせ、あいつは』という絶望を捨てろ。
いいから、貸してやれ。
そうしたら、あなたたちは大きな報いを得る。
『いと高き方』の子どもになれるぞ。

いいか、『いと高き方』は、
誰の利益にもならない碌（ろく）でなしに対しても、
悪人に対しても、
実に優しく親切で太っ腹なお方だ。

あなたたちは、とにかく、情け深くしなさい。
それはつまり、
あなたたちの父上が情け深くしてくださる、
その通り、あなたたちも、しなければならないということだ。」